

## 平成28年結核登録者情報調査年報集計結果のポイント

- ① 平成28年の新登録結核患者数は17,625人で、結核罹患率(人口10万人対の新登録結核患者数)は13.9であった。罹患率の減少傾向は続いているが、前年の罹患率と比べての減少率は3.6%で、平成27年の減少率6.5%と比べると大きく減少した。
- ② 欧米諸国の多くは結核低蔓延の水準である罹患率10を下回っているが、日本の罹患率13.9はまだその水準に至っていない。一方、日本の近隣アジア諸国における結核罹患率は、日本の結核罹患率と比較してかなり高い状況である。
- ③ 全体では減少傾向がみられる新登録結核患者数であるが、年齢階級でみると患者数の増加がみられるところがあった。
  1. 90歳以上の高齢者層：日本の結核患者の多くを占める高齢者結核のなかで90歳以上は患者数が増加している。
  2. 15歳から29歳の若者層：外国出生患者数増加の大きな影響がみられる。
- ④ 外国出生の新登録結核患者数は年々増加をみてきたが、平成28年は前年から174人の大きな増加となり、新登録結核患者数の7.6%となった。特に20歳代では前年の565人から712人と大きな増加となり、外国出生患者が占める割合も57.7%に達した。
- ⑤ 新登録結核患者の高齢化はさらに進み、60歳以上の患者割合は71.6%、80歳以上は39.7%に達した。
- ⑥ 都道府県別にみると、北海道、東北、甲信越を中心に10の県が結核低蔓延の水準である罹患率10を下回った。一方で高罹患率上位は大都市を含む都府県が占め、結核患者の大都市への偏在化がみられた。
- ⑦ 新登録肺結核患者のうち多剤耐性結核患者(イソニアジド、リファンピシン両剤に耐性)は49人で前年の48人からほぼ横ばいであった。肺結核培養陽性患者の多剤耐性結核患者割合は0.5%であった。
- ⑧ 新登録肺結核患者のうち、症状が出てから医療機関に受診するまでの期間が2か月以上かかり受診が遅れた者は19.7%であった。特に働き盛りの30~59歳で感染性が高い塗抹陽性患者に限定すると33.3%で、3人に1人に受診の遅れがみられた。
- ⑨ 潜在性結核感染症(LTBI)の新登録患者数は7,477人で前年より802人増加した。特に40歳以上で増加がみられ、60歳代では前年から241人増加した。